
欲しいものは

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲しいものは

【Nコード】

N5500G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

とても欲張りな弘道。彼のことを心配したお父さんとお母さんは欲しいものを作ってみるように言いました。すると、少し風刺も入れた童話です。

第一章

欲しいものは

弘道はとても欲張りな子供でした。

何でも欲しがります。欲しいと思ったらいてもたってもいられなくなります。それで駄々をこねていつも皆を困らせる子供なのです。

「あれ欲しい、あれ欲しいよ」

「買って、買って」

「あれ頂戴」

言う言葉は大抵こういったものです。その駄々もあまりにも酷いので皆困り果てています。そしてそれと一緒に弘道のこれからがとても心配になるのです。

「どうしたものかしら」

「困った子だよ」

お母さんもお父さんも頭を抱えるばかりです。泣く子には勝てないといひまして弘道が泣き叫ぶとそれでどうしようもなくなってしまう買ってしまふのです。どうしても逆らえないのです。そのことにも頭を抱えているお父さんとお母さんなのでした。そして他の人達も。

皆そのことに本当に困っていてそれと一緒にとても心配でした。

このままでは弘道はどんな大人になってしまうのか。そのことも考えて本当に困っていました。

そんな中で弘道のお爺ちゃんが言いました。考えた末にこう言うのでした。

「こうなったら」

「どうするの？お父さん」

「うん、弘道に作らせてはどうかな」

こうお母さんに答えました。

「弘道が何か欲しいと言い出すとな」

「ええ」

「その時にじゃあ自分で作れと言ったよ」

お爺ちゃんが考えたのはこのことでした。欲しいものは自分で作れということでした。

「それでどうかな」

「そうね」

まずお母さんがお爺ちゃんの提案に頷きました。

「それ、いいかも」

「そうだね」

続いて頷いたのはお父さんでした。

「欲しいのなら自分で作れって言えばね」

「そうしたら少なくとも買わなくて済むし」

「お金はかなり助かるね」

「それだけではないかもな」

お爺ちゃんはまた言いました。

「ひよっとしたらじゃが」

「ひよっとしたらって？」

「まだ何かあるんですか？」

「これはやってみないとわからないな」

けれどお爺ちゃんは今はそれ以上は言わないのでした。

「実際にな」

「じゃあ少なくとも今はそれをやらないと駄目なのね」

「そういうことじゃ」

こうお母さんとお父さんに述べるお爺ちゃんでした。

「とにかくじゃ。やってみよう」

「ええ、そうね」

「それでは」

何はともあれ実際にそれをしてみることになりました。二人は早速弘道連れて外に出ました。すると彼は早速おもちゃ屋さんの前

でプラモデルを見て騒ぎだしました。

「あれ欲しい、あれ」

「あれが欲しいの？」

「うん」

お母さんの問いに大きく頷くのです。

「欲しい、欲しいよ」

「そう。それじゃあね」

お母さんはお爺ちゃんの話の思い出しながら言いました。その言葉。

「自分で作りなさい」

「自分でって？」

「そう、自分でね」

こう弘道に対して言うのです。

「いつもあれはどうしてるかしら」

「お父さんが作ってくれてる」

「弘道ちゃん自分で作ったことないわね」

あえてしゃがみ込んで弘道に視線を合わせて話をします。そうして彼にじっくりと言い聞かせるのです。

「今まで。そうよね」

「うん」

確かに欲張りですけど弘道は嘘をつく子供ではありませんでした。ですからお母さんの問い掛けに素直に頷くのです。

「僕作ったことない」

「だったら。自分で作ってみなさい」

「自分で？」

「そう、自分でね」

また弘道に言うのです。

「作ってみなさい。いいわね」

「自分で作るの？僕が？」

「そうよ」

あえて優しい声で彼に言いました。

第二章

「欲しかったら自分で作るのよ」

「僕が。自分で」

「じゃあ。お家に帰ったらね」

続いてこう話します。

「プラモデル作りなさい。いいわね」

「うん、欲しかったら作るの？」

「そうよ」

また彼に言います。

「わかったわね。作りたくなかったら欲しいって言わないの」

「欲しい」

弘道はこの要求には勝てませんでした。これだけは。

「僕、あのプラモデルが欲しい」

「それじゃあ作りなさい」

お母さんはまた弘道に言いました。何度でも言うつもりですし実際にそうしています。こうして彼によく言い聞かせるのでした。

「いいわね」

「うん」

お母さんの言葉に頷きました。こうして弘道は家に帰るとすぐにそのプラモデルを作るようになりました。けれど実は弘道は。

プラモデルを作ったことがありますでした。箱を開けてプラモデルを見てまず。思わず目を丸くさせてそのうで大声で言っのでした。

「何！？これ」

「これがプラモデルなんだよ」

「嘘だ」

お父さんの言葉を聞いても信じませんでした。

「こんな小さいのが一杯一緒になってるだけじゃない。こんなのプ

ラモデルじゃないよ」

「ここから作るんだよ」

けれどお父さんはまた弘道に言いました。

「ここからね。皆そうやって作るんだよ」

「プラモデルって作るものなの？」

「プラモデルだけじゃないよ」

お父さんも言葉は優しいです。けれどしっかりとした声で弘道に言うのでした。そうしないと何も手に入らないと言うかのように。

「何でもそうなんだよ」

「何でも」

「欲しいのなら作るんだよ」

「欲しいのなら作るの」

「そう。何があってもね」

優しい声で弘道に教えます。見ればその目もかなり優しいものになってます。お父さんはその目でも弘道に言うのでした。

「作らないといけないんだよ。自分でね」

「自分で作るの」

「そう、自分でね」

「お母さんも同じこと言ってた」

「お父さんもお母さんも同じなんだよ」

この言葉にはこう、といった感じで待っていたかのような言葉になっていました。

「皆。同じことを言うから」

「同じなの？」

「そう、同じだよ」

言葉を繰り返してみせます。

「同じだからね。だから作るんだ」

あらためてプラモデルを作るよう弘道に言うのでした。

「いいね」

「うん」

素直な弘道はその言葉に頷きました。

「それじゃあ」

「はい、これを塗ってね」

ここであるものを出してきました。それは瓶に入ったものでした。

「こういうふうだね。塗るんだよ」

パーツを二つ取ってそれを合わせながら説明します。

「それで付けてみるんだよ」

「ええと」

まだ小さい弘道にはよくわかりません。その瓶も何とか開けた感じです。ここで弘道はお父さんにこの瓶のことを尋ねるのでした。

見れば蓋の先に瓶の中に入るようにブラシがあります。

「これ何なの？お父さん」

「セメンダインっていうんだ」

「セメンダイン？」

「そう、これをね」

その蓋を手にとって今取った二つのパーツの端にそれぞれ塗る動作を試みます。

「こうして。すると」

「すると？」

「これとこれがくつつくんだ」

実際に二つのパーツを合わせてみせます。

「そうしたら外れなくなるから」

「そうなんだ」

「さあ、やってみるんだ」

そのうえでまた息子に言うのでした。

「よくね。そうそう」

見ればはじめてなのに結構上手く塗っていきます。そうしてちゃんとくつつけるのでした。

第三章

「そんな感じだよ。それじゃあ他のもしてみるんだ」

「次はこれとこれ？」

「あつ、それは合わないよ」

見れば左右で全く違う形のパーツを出してきた弘道でした。お父さんはそれを見てちゃんと教えてあげるのです。けれどあくまで弘道にやらせるのです。

「それはね」

「合わないの」

「形をよく見て」

弘道に言います。

「そうしたらわかるから」

「うん。そういえば」

ここで弘道はまたあることに気付きました。それは。

「ここに何か書いてあるよ」

プラモデルの箱の中にあつたある紙を見て言いました。

「これって何なの？」

「これは説明書なんだよ」

「説明書？」

「お父さんが今弘道に言っていることが書かれているんだよ」

「そうなんだ」

「本当はこれを見ながら作るんだよ」

このこともここで弘道に教えるのです。

「これを見ながらね」

「そうなんだ。これを見て作るんだ」

「できるかな？」

弘道に対して尋ねました。

「そうして。どうだい？」

「うっん、僕字が読めないから」

弘道はまだ小さいので字が読めないのでした。それで説明書も読めません。そのことを自分でわかって困った顔になるのでした。

「全然わからないよ」

「字が読めるようになりたいと思う？」

「うん」

このことも素直に答える弘道でした。

「そうしたらプラモデルもずっと簡単に作れるよね」

「そうだよ」

「だったら読めるようになりたい」

「こう答えるのでした。」

「けれど今は」

「そう。作り方は少しずつお父さんが言うよ」

今はお父さんが教えるのでした。

「今はね」

「けれど今度からは僕がこの説明書を読んで作るんだ」

「そう、何でもそうだよ」

「何でも」

「字を勉強しながら」

字を勉強することを言うのは忘れませんでした。何しろそれができないとどうしようもないのですから。お父さんもそのことはわかっています。

「欲しいものは何でも自分で作ってね」

「そうしてなんだ」

「そう。焦ることなくね」

また言うお父さんでした。

「作っていったらいいから」

「うん。じゃあこのプラモデルも」

お父さんの話を聞き終えてまたプラモデルに顔を向ける弘道でした。

「作るから。僕が」

「作るのは楽しい?」

「楽しい」

明るい声での返事でした。

「こんなに楽しいのはじめてだから。最後までやりたい」

「そうか、それじゃあ付き合おう」

お父さんもそこまで聞いて腹を括ったように弘道に言うのでした。

「それで。今度は」

「これとこれ?」

「そう、その二つだよ」

今度弘道が出してきた二つのパーツには笑顔で頷いてみせます。

「その二つにまたセメンダインを塗って」

「こうだよね」

「そう。それをさっきのと合わせてつけて」

「こう?」

「それでまた一つできたね」

「何か。できてきた」

見ればそれは腕でした。ここで弘道は自分が作っているものがわかってきたのでした。本当に作っているうちに、でありました。

「これは………うで?」

「そう、腕だよ」

「僕が作ったんだ」

自分でそのことを言うのでした。

「僕が。今」

「そうさ。弘道が作ったんだ」

「嘘みたいだ」

何か自分では信じられないのでした。自分が腕を作ったなんて。少し呆然とした声になっていました。

「僕が。そんな」

「けれど他の部分も作れるんだ」

「僕が？」

「そう、弘道が」

このことをよく教えるお父さんでした。

「作れるから。それじゃあ次は」

「うん。じゃあこれとこれ」

またパーツを取り出しながら話をします。そうして本当に時間をかけてプラモデルを作っていつて何日もかかって。そうして遂に作ったのでした。あちこちに乱暴に取った跡があったり接着剤の跡があったり色も塗っていないし随分と汚いものですがそれでもできたのでした。それはロボットでした。

第四章

「できたよ」

「そう、できたね」

「僕が作ったんだ」

お父さんとお母さんに対して言います。はじめて自分で作ったものでした。

「このロボットは」

「そうよ」

お母さんはにこりと笑って弘道に言いました。

「ひろ君が作ったのよ」

「そうだよね。僕が」

「欲しかったのよね」

そして今度はさりげなく弘道の欲しがる癖を言いました。

「このロボットが」

「うん、凄く欲しかったんだ」

自分でもそのことを言います。だから買って買ってと駄々をこねたのです。このことは弘道自身もよく覚えていることでした。忘れてはいません。

「これ、とてもね」

「それを自分で作ったのよ」

「僕が」

「そうよ。欲しいものはね」

「うん」

お母さんの言葉を聞きます。お母さんはじっと弘道の目を見て話をしています。

「自分でね」

「僕が？」

「そう。ひろ君が作るものなのよ」

こう教えるのですた。

「自分でね。いいわね」

「欲しいものは自分で作るんだ」

「そうよ」

また弘道に言いました。

「自分でね。わかったわね」

「うん、わかった」

弘道はお母さんのその言葉に頷きました。

「これからは欲しいものは自分で作るよ」

「それでね」

お母さんは弘道は頷いたのを見てさらに言いました。この辺りはお母さんもよくわかつていたのでした。

「一つのものを作っている間は他のものはあまり作ったら駄目よ」

「どうしてなの？」

「だって。それを完全にしないと作ってもらっているものが可哀想でしょ」

「可哀想なんだ」

「そうよ」

こう弘道に教えるのですた。

「折角作ってもらってるんだから」

「そうなんだ。可哀想なんだ」

「だから。いいわね」

教える言葉はまだ続きます。

「一つのものを作ったら。ずっとね」

「わかったよ、お母さん」

やっぱり弘道は素直でした。お母さんの言葉にすぐに頷きます。それから自分でもこのことを言うのです。

「僕、自分で作るよ」

「ええ」

「それで作っている間は他のものは作らないよ」

「このことも言いました。」

「これからは。そうしないと駄目なんだよね」

「そうよ。これは守ってね」

「うん」

お母さんの言葉に頷きました。

「ずっと。そうするよ」

お母さんは笑顔で弘道の言葉を聞いていました。その横ではお父さんも。こうして弘道はそれから欲しいものは自分で作るようになった。一つのものを作っている間は他のものは作らなくなったのでした。

庭先で模型のプロペラの飛行機が飛んでいます。木とビニールのその飛行機は一旦飛ばすとそのまま軽やかに空を飛びます。庭に出る場所に腰掛けてそれを見ている男の子はふとした感じで後ろの畳の部屋で洗濯物を畳んでいるお婆さんに対して言いました。

「この飛行機凄くよく飛ぶね」

「あら、そうなの」

「飛ぶよ。よくこんなのがあったよね」

「お爺ちゃんが作ったものなんだよ」

「これもなんだ」

「そうだよ」

お婆さんは洗濯物をたたみながら笑顔で男の子に言いました。

「その飛行機もね」

「居間の人形もそうだったよね」

「そうだよ、あれもね」

「あとこの家の椅子やテーブルも」

「何でもそうだよ。全部お爺ちゃんが欲しいと思ったからね」

「凄いよ」

男の子はその話を聞いて言いました。

「全部作っちゃうなんて、自分で」

「お爺さんは発明家だから」

「それで凄く有名だしね」

「子供の頃からね。何でも作ってたんだって」

「ふうん」

「欲しいと思ったら。まず自分で作って」

お婆さんはこのことを男の子に言うのでした。

「一つのもを作ったらそれにかかりつきりになってね」

「それでこの飛行機も作ってたんだ」

飛行機はまだ空を飛んでいます。もうかなり長い間飛んでいます。

男の子は青く太陽が輝く空に飛んでいるその飛行機を見上げたまま
お婆さんと話を続けるのでした。

第五章

「欲しかったから」

「そうだよ。だからあんたもね」

「うん」

「欲しかったら自分で作るんだよ」

「こう男の子に言いました。」

「自分でね。いいね」

「そうしたらお爺ちゃんみたいになれるんだ」

男の子はお婆さんのその話を聞いて思いました。

「そうしたら」

「そうだね。凄い発明家になれるよ」

「発明家か。いいなあ」

男の子は発明家と聞いてそこに憧れを抱きました。

「僕も。そうになりたいな」

「頑張るんだよ、だつたらね」

「うん、ところでさ」

話を聞いてからまたお婆さんに尋ねたのでした。

「お爺ちゃんは今何処にいるの？」

「研究所に行ってるよ」

「けんきゅうじょ！？」

「お爺ちゃんがお仕事をする場所だよ」

男の子にわかりやすく説明しました。

「今はそこにいるよ。ずっとね」

「そこにいるんだ。けんきゅうじょってところに」

「一旦中に入ったら中々出て来ないからね」

そうは言いながらも微笑んでいるお婆さんだった。

「お義父さんもお義母さんも言ってたよ。本当にはじめたらそれにかかりつきりって」

「ひいお爺ちゃんといいお婆ちゃんだよね」

「あんたから見ればね。そうなるよ」

「お爺ちゃんも子供の頃があっただ」

これはまた小さい男の子には想像できないことでした。

「あのお爺ちゃんにも」

「誰にだってあるよ」

お婆さんは優しい声で男の子に教えました。

「それはね」

「そうなんだ」

「それでね。今は」

「今は？」

「タイムマシンを作ってるよ」

男の子にこのことも教えました。

「タイムマシンをね」

「それ何？」

「時間を旅行できるものだよ」

またわかりやすいように言いました。

「それはね」

「時間を旅行できるの？」

「それに乗りたいの？」

「うんっ」

満面の笑顔をここでお婆さんに向けて答えたのでした。

「すぐく。楽しそう」

「だったら。自分で作るんだよ」

「僕が！？」

「そうよ」

優しい声で男の子に言うお婆さんでした。ここでも。

「自分でね。お爺ちゃんもそうだったし」

「お爺ちゃんもなんだ」

「欲しいものは自分で作る」

お婆さんは言います。

「だからだよ。いいね」

「自分で作るんだ」

男の子はお婆さんの今の言葉を聞いて考える顔になりました。

「そうなんだ。自分で」

「欲しいものはね。何でもね」

「お爺ちゃんはそうしてきたんだね」

「そうやって凄い発明家になったんだよ。だったらあんたもね」

「うん、それじゃあ作るよ」

男の子はお婆さんの言葉に頷いて明るい声で述べたのでした。

「僕も。自分でね」

「作るんだね」

「欲しいものはね」

そのことをまた言いました。

「作るよ。自分でね」

「そうだよ。自分でね」

お婆さんも男の子に言い聞かせるようにして言葉を続けます。

「作るんだよ。いいね」

「うんっ」

明るい声と太陽そのものの晴れやかな笑顔で頷いた男の子でした。そして自分もお爺さんみたいに、弘道お爺さんみたいになろうと決意したのでした。奇麗な青空の下で。

欲しいものは 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5500g/>

欲しいものは

2010年10月8日15時54分発行